

白老仙台藩陣屋（国の史跡）（北海道白老町）（史跡公園）

仙台藩白老元陣屋は、江戸時代末の安政3年に完成。慶応4年までの12年間にわたり、常時100名以上の藩士たちが駐屯していた本陣・詰め所です。当時の幕府は、開国時におけるロシア勢力の南下に備え、仙台藩ほか奥羽諸藩に蝦夷地の警備を命じ、その守備範囲は白老から国後・択捉島までの広大な範囲におよびます。各地に出張陣屋を置き、白老の元陣屋はその警備の中核として機能しました。1867年、江戸幕府が倒れ、翌年には戊辰戦争が勃発。新政府軍は蝦夷地へ進出し、元陣屋追討軍を白老へ進める計画が立案され、仙台藩士たちは追討軍の到着を前に海路仙台へ撤退。それによって、元陣屋での12年間の歴史に終止符が打たれました。その後、元陣屋跡地は道内最大規模として国の史跡に指定され、現在は史跡公園として大切に保存されています。

白老観光協会による

この陣屋は安政3年（1856）蝦夷地の防備を固めるため、仙台藩が築いたものである。

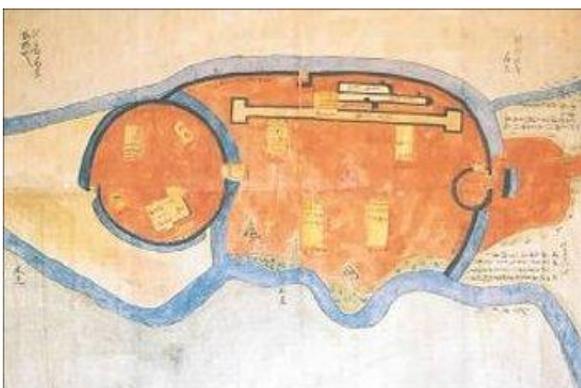
安政元年（1854）徳川幕府は鎖国を解いてアメリカ・ロシアと和親条約を結び函館港などを交易場としたこのため幕府は、蝦夷地を直轄地とし、翌年仙台藩を初め津軽・秋田・南部の奥羽諸藩と松前藩に警備を命じた。（安政6年、庄内藩と会津藩も加わる）

仙台藩の守備範囲は白老から襟裳岬を超えて、国後・択捉までの東蝦夷地であったため、白老に元陣屋を、広尾、厚岸、根室、国後、択捉に出張陣屋を築いた

元陣屋の面積は6.6haで堀と土塁を円形にめぐらして内曲輪と外曲輪を構成している。ここには、本陣・勘定所・穀蔵・兵具蔵・長屋などがあり、少しはなれた東西の丘陵に塩竈神社と愛宕神社を祭った。

元陣屋には、200名ほどの人々が駐屯して警備に当たったが、明治元年（1868）戊辰戦争の勃発によって撤収するまでの12年間なれない土地での仙台藩士の苦闘が、この陣屋跡に刻まれている

以上、案内板より



内曲輪の様子